

## 技術評論

常務取締役 野田博章

「情報公開」は混迷する現代を乗り切るキーワードです。宮地技報はその年の「会社が行った工事と研究開発の集大成」ですが、15年前の創刊号で上前社長は、発刊の意義として「社員の啓蒙」「社内の情報伝達」と「社会的な貢献」の3つを挙げています。社内だけではなく外に向って、社会の要請に応えるべく、自社の技術を世に公開する義務もあると述べられています。

公共事業すなわち社会資本の整備に対しアゲインストの世間の風が吹き荒れている現在、我々は、「公共事業に対して世間の人達は何を期待しているのか」、「それを受けて発注者の方々は我々施工業者に何を期待しているのか」、その結果「どう評価されているか」を絶えず意識して行動しなければなりません。

「相手が知りたい情報」が提供されていないということにならないよう情報の公開に努めなければならないし、その一部にこの宮地技報が寄与する事を期待しています。

今我々に求められている技術とは、計画、設計、製作、架設、床版、と一連の流れである橋梁新設の技術と、維持管理、補修補強、架け替えと流れる橋梁管理の技術を合わせた「トータルな橋梁技術」ではないかと考えます。そして今、橋梁新設、橋梁管理の両技術ともに新しい大きな流れが起こっています。

橋梁新設の新しい流れは、公共事業のコスト削減の要請が源流で、橋建協が提案した「新しい鋼橋の誕生」がその代表例かと思えます。幸い当社は提案された2主鈎桁、開断面箱桁、合理化トラスなどの形式にも取り組んでいます。新しい挑戦ですので様々な面で苦しいですが皆で力を合わせて乗り越えていかなければなりません。

その中でも注目すべきものは「床版がPCである」という事かと思いますが、積極的にかつ早期に、このPC床版の「設計技術、施工技術」を取得しなければなりません。独断と偏見で意見を言わせていただければ、過去において、ともすれば床版に対しての力点は少し横に置いていたのではと思いますが、今後はしっかりと床版にも力点を置く必要が有ると思えます。

PC床版、合成床版、波形ウェブ、上部下部一体剛結など、鋼とコンクリートの複合構造が、新しい橋の今後を握っているという事は間違いありません。コンクリート技術の取得に積極的に取り組んでほしいと思えます。

そしてその成果は、様々な機会を捕らえて外部へ発信しなければなりません。情報公開です。

現在の日本は、すでに高度成長期から安定期に入っていますが、我々が求められている大きなテーマの一つは、「既存の社会資本をどう活用していくか」であろうと思います。このテーマに応える為にも、橋梁技術の一方の軸である維持管理技術、補修・補強技術の流れは、橋梁のリニューアル技術の確立かと思えます。

現在、橋梁など公共の土木構造物は、当初の仮定条件をはるかに越える重交通や大気汚染など様々な悪条件に曝されながらも、不断の維持管理によってその機能が発揮されています。が、昨今の相次ぐコンクリート片落下等に代表されるの土木構造物のトラブルは、構造物が直ちに破壊するというものではないものも、国民の土木への信頼を大きく裏切る事となっています。直ちに信頼回復とはいかないでしょうが、皆が納得する点検・診断の手法を早く確立しなければなりません。

橋梁の補修・補強では、その手当てする箇所が一部ではあっても、想定される全体系への影響を配慮しなければならず、新設よりはむしろ高度な技術を必要とするケースが多々あります。幸い宮地グループは、宮地鉄工所、宮地建設工業、宮地総合メンテナンスとそれぞれ特色ある技術を持った会社で構成されています。力を合わせて、点検・診断、リニューアル計画立案、施工とトータルのマネジメントが出来るグループになる事が時代の要請に応える事と考えます。しかしながら毎日の仕事に追われ、余裕を持ちながらの、技術の向上、技術の研鑽は困難を極めますが、橋梁管理技術は「トータルな橋梁技術」の片方の軸です。我こそはこの分野に飛び込む技術者の出現を期待します。90年以上の歴史を持つ宮地が過去に製作・架設した橋梁は、日本全国に多数点在している事でしょうが、自主研究として独自に現状を調査し、それらの橋梁の管理者へ「リニューアル計画」を提案するぐらいのエネルギーを燃やして欲しいと思います。有効な情報公開となる事は間違いのないでしょう。

宮地の技術陣は、新しい流れに乗り遅れることなく、むしろ果敢に先取りして成果を挙げ、学会や各種の委員会、また現場でと、技術を情報公開していくチャレンジ精神を持った技術屋集団であって欲しいと思えます。